



特集

民俗芸能のパワー

変わらぬ正月風景

「あー、ごめん。今、海なんだわ。明日は時化で漁に出ないからさ、明日、もういつぺんかけてきてー」。松前神楽の伝承を担う清部松前神楽保存会会長・斉藤昇一さんは、マグロ一本釣り漁の真っ最中だった。清部八幡神社（松前町）の新春神事について取材のお願いの電話をした時のことである。

なぜ、神楽の担い手が荒波の中にいるのだろう。北海道博物館の学芸員、舟山直治さんはこう答える。「能や歌舞伎といった古典芸能は職業として師匠が弟子に伝えていくものですが、民俗芸能は他の職業を持っている人たちが祭礼や年中行事の時に奉仕するのです。清部地区でも昭和三十年代に青年会が保存会を結成し、松前神楽を中心に清部八幡神社の神事に関わっています」。

松前神楽は国指定重要無形民俗文化財で、一六七四年（延宝二）、松前藩主十世矩廣公の時代に今日の形態に整え

伝統が心身を育む

北海道各地には260件(*)もの民俗芸能が息づいている。

それらは、アイヌ民族による歌舞、近世から道南の和人地で行われていたもの、明治以降に全国から伝わったものに大別できる。

伝承においては、保育園児から小中高校生というフレッシュな世代が大活躍。

人口減少、高齢化、コロナ禍による中断を乗り越えて伝えられていく、

大地に根ざした芸能を訪ねた。

(写真上)2023年(令和5)10月7日、札幌市篠路コミュニティセンターで開かれた篠路文化祭で「勸進帳(かんじんちょう)」を演じる篠路中央保育園の園児。コロナ禍による3年の中断を乗り越えての演技だった。

(※)北海道教育委員会2018年調査

文=北室 かず子
写真=田淵立幸

られた。以来、藩主の手厚い庇護のもと、神職による神楽が発展した。明治時代になり藩の庇護が失われると神職と氏子の協力によって家内安全、豊漁祈願、疫病退散などを願う神楽が継承されてきた。所作の一つ二つに、神様への敬意と穏やかな暮らしへの祈りが込められている。やがてニシンが獲れなく

なつて人々がニシンを求めて日本海沿岸を北上したように、神職も小樽、留萌、小平、利尻、礼文などに居を移し、各地に神楽を広めた。現在、函館、松前、福島、小樽の四ブロックがあり、各エリアの神職が中心になつて伝承されている。齊藤さんは、「ひいじいさんがやっていたのを小さい時から見て

育ちました。十二月に入ると、招待神楽の希望者を問う回覧板が町内を回るんですよ。招待神楽とは、正月や新築、厄払いに招かれて舞う松前神楽です。函館近辺からも申し込みがあります。十二月はびつしりその練習をします」。元日、家々の門口を清める「門祓い」も大事な神事だ。「朝八時から

ら九時に出発して約百七十軒を回ります。塩で清める禰宜、御幣を持つ二人の禰宜の後に、お獅子の役が続きます。お獅子は掲げ持った獅子頭をぐっと上げてお祓いします」と齊藤さん。約二百年、変わらぬ清部の正月である。

松前神楽には柳舞、鈴上舞、千歳、三番叟舞、翁舞、山神舞などがある。特に鈴上舞は子どもが奉納すること

が多い。舟山さんいわく「過疎化が進むまで、郷土学習の一環として小中学校で伝承している地域を多くみることができました。ところが少子化で学校が統廃合されてしまい、伝承が途絶える危機がありました。今は地域の保存会や神社が伝承活動を行い、神社の祭りや地域の文化祭で披露する形が増えています。進学や就職で故郷を離れても、祭りには戻ってきて舞う子もいるようです」。



『正月十一日後より獅子舞ひ市中囃し歩行の図』『松前歳時記草稿』。函館市中央図書館蔵



昭和60年代から北海道の民俗芸能を調査・研究してきた舟山さん。

名人芸の系譜

森町の砂原稲荷神社は社伝によると創建四百八十余年という歴史ある社。宮司の小板欽司さんはこう語る。「昔から神社の祭祀に女の

子が巫女舞を奉納してきた伝統があります。二〇二五年(平成二十七)に砂原神楽会を立ち上げ、今は小学生から高校生まで十五人が活動しています。子どもは幼い頃からお祭りのたびに神楽を目にしている、いつか自分も装束を身に着けて



寒風の中、家々を巡る門祓い。『松前歳時記草稿』の絵図と同じ風景が正月の松前町で行われている(先頭に塩で清める欄干がある)。2001年(平成13)1月1日撮影。写真提供=舟山直治



舞ってみたいという気持ちが自然に湧き上がってきます。月三、四回、社務所に集まって稽古をします。舞、太鼓。覚えるのが早い子、ゆっくりに子。それぞれの子に合わせる。それが大事で、奉納できる演目が増えていくことに子どもたちの成長を感じています」。

小板さんの言葉から、民俗芸能伝承の場は子どもにとって家庭と学校以外の第三の居場所であることがわかる。親でも教師でもない大人が真剣に関わり、導いてくれる経験は成長にはかりきれない大きなものがあるのではなからうか。子どもの頃から修練を積んで名人の域に達した人々は道内各地にいる。そんな一人が小樽の潮見ヶ岡神社の神楽で太平楽を舞う本間則夫さんだ。舟山さんいわく「両手に持った盆を落とさずアクロバティックに舞うのがうまい。笑わせる。役者なんですよ」。

本間さんの本業は給排水や冷暖房工事を行う本間設備工業の社長さん。もの心ついた時から父親の舞いを見ていたという。太平楽は松前神楽の演目ではなく、新潟県発祥



2023年11月、森町文化祭で松前神楽の利生舞(りしょうまい)を披露する砂原稲荷神社の砂原神楽会の子どもたち。利生舞は人々の幸せを祈る舞いである。コロナ禍での中断が響かないよう、できる範囲で練習を続けてきた成果だ。写真提供=舟山直治

の三条神楽のもの。「松前神楽は改まった雰囲気なので、笑える要素を入れて皆を喜ばせたいと思って。カッパ酒を飲んで酔っぱらう所作は私のオリジナルです」。潮見ヶ岡神社の祭では、もう一人、太平楽を舞う人物がいる。本間さんの孫の藤井一毅さんだ。本間さんについて三歳から神楽に親しみ、太平楽は六歳から。現在、小樽双葉高等学校一年の十五歳。手に貼り付いている



藤井一毅さんの流れるように美しい舞い。祖父の傍らで幼い頃から見つめて会得した技が人々を酔わせる。



本間さん(右)と孫の一毅さん。潮見ヶ岡神社の他、後志管内の神社の例大祭に赴いて舞うが、祭りは平日のことも多い。小樽双葉高校は「チャレンジ奨学生」として支援し、一毅さんの公欠を認めている。

かのように落ちない盆の秘密を聞くと、「遠心力です。動きがゆつくりでも遠心力を利用してあるので」と言う。優美にして摩訶不思議。この妙技を会得するにはさぞや苦勞があったのではないか。しかし藤

井さんは「これまで稽古を苦痛に思ったことは一度もないんです。もともと太平楽を広く知っていただけのように、しつかり伝承してきたいです」と力強く答えてくれた。一度、途絶えても意思さえあれば復活が可能であることを示す例も、道内にいくつもある。利尻麒麟獅子は約三十年前に獅子頭が発見され、利尻町立博物館の学芸員だった西谷榮治さんが鳥取県の研究者と交流し、自らも鳥取県に赴き地域の機運が高まって復活にこぎつけた。士別市では日向神代神楽を地



盆がびたりと手に貼り付いたように見える本間さんの妙技。写真提供=本間則夫

元の中多寄青年団が復活させ保存会も誕生したが、やがて高齢化で解散。保存会元会員に市職員や中学生が加わり伝承に取り組んでいる。道内二百六十件の民俗芸能には、それぞれにかけがえのない物語がある。

歴史を担う勇者は園児

「子どもの力は無限ですよ」と言うのは、認定こども園 篠路中央保育園の園長、林茂子(はら しげこ)さんだ。同園では一九八六年(昭和六十二)から「篠路子ども歌舞伎」を公演している。年長さんに上がった五歳・六歳児が四月から稽古を始め、秋の篠路文化祭、保育園のお遊戯会、年明けの後輩への伝承式と三回披露する。回を重ねるごとに目覚ましい成長を遂げるという。林さんいわく「子どもは動きまわるものだから、動かないでじっと人の話を聞けるようになります。みんなが主役なんだよと何度も言い聞かせています」。筆者は昨年十月七日、篠路文化祭での公演を鑑賞して圧倒された。美しく堂々とした所作で長台詞を高らかに決め、全員が

自分の役割を理解している。体も小学三年生くらいの大きさに見える。この子らが稽古を始めてわずか半年の園児だとは、信じられない思いだった。「小学校の校長先生が園の子らの語彙数を調べてくださったことがあって、ふつう二百語のところ二百三十語ほどあることがわかりました。同年齢の子が使わない言葉や表現ができていたとのことでした」と林さんは言う。



篠路子ども歌舞伎の開演を告げる口上。篠路中央保育園の演目には「勧進帳」、「忠臣蔵」、「白浪五人男」があり、年替わりで演じる。2023年10月7日、篠路文化祭にて。

始まりは一九八五年（昭和六十）。
 篠路コミュニティセンターのこけら落として、かつて篠路にあった農村歌舞伎の「白浪五人男」を園の理事長（当時）・柳沢正幸さんらが再現し、喝さいを浴びた。それを聞いた林さんは園の創立三十年祝賀会に保育士に歌舞伎を勧め、保育士が「保育園五人女」を演じた。こちらも大好評。地域に根差した篠路歌舞伎を子どもに伝えたいと考え、一九八六年、「子ども五人衆」を年長さん全員で演じた。衣装はすべて職員の手作りだった。同年、柳沢さんを会長に篠路歌舞伎保存会が立ち上げられ、以来、同会は子ども歌舞伎を全面的に支えている。五代目会長の^{おおたかひでお}大高英男さんは篠路歌舞伎の歴史を教えてくれた。「明治時代、入植者たちは石狩川の氾濫に苦しみました。先が見えず酒や博打にのめり込む者も出てしまい、戸長は皆の心が一つになれるものをと、青年らに芝居を勧めました。青年の一人、大沼三四郎は、歌舞伎を見たこともない青年たちを引っ張っていき、農作業の傍ら稽古に励むうちに荒んでいた青年たちの心に明かり

が灯ったのです」。一九〇二年（明治三十五）、「篠路村烈々布素人芝居」を春祭りで初公演。その四年前は流域全体で死者百十二人という石



篠路歌舞伎保存会会長の大高英男さん（右）と副会長の小野紘一さん。2023年10月7日、篠路文化祭にて。



篠路歌舞伎保存会は、2023年10月29日、会員による初の公演として朗読劇「唐茄子屋（とうなすや）」を行った。写真提供＝篠路歌舞伎保存会

狩川災害史上最悪の洪水が起き、初公演の二年後には追い打ちをかけるように再び大洪水が起きた。そんな苦難の中で歌舞伎は一体感

を育み、離村を抑える効果もあった。台本を読むことで青年の学力も向上した。大沼は芸名を^{はなおかしのぶ}花岡義信と名乗り、全盛期には回り舞台つき



源頼朝から奥州へ逃れる義経一行の物語「勧進帳」で、山伏の姿に扮した弁慶が、関所の役人と戦おうとする義経の家来を押し止める場面。全身にみながる気迫が大きく見せる。2023年10月7日、篠路文化祭にて。篠路駅から徒歩約10分の篠路コミュニティセンターには篠路歌舞伎の歴史が展示されている。



1934年（昭和9）11月23、24日に行われた花岡義信引退興行の歌舞伎「義経千本桜」。



2023年10月7日に行われた篠路子ども歌舞伎「勸進帳」。1986年以来、600人以上の園児が歌舞伎役者を務めてきた。

の常設劇場を建設。近隣町村から見物客が殺到した。しかし、やがてラジオ放送が始まり、札幌中心部には活動写真館もでき、村の歌舞伎を振り返る者はいなくなった。一九三四年（昭和九）、大沼は花岡義信引退興行で花道を飾った。その後、戦後初の普通選挙で篠路村村長に就き、社会福祉活動に尽力した。

この大沼と二人三脚で村の社会福祉に貢献したのが、林園長の父、林賢治氏だった。「父は篠路村に赴任した医師でした。当時の篠路は純農村で、農繁期の子を預かるところがなかったので昭和三十年に季節保育所を創設しました。医師として病を治し、続いて子どもを心育てることに生涯をかけたのです」。

コロナで三年間、園外への披露はできなかった。篠路歌舞伎保存会ではこの間に『歌舞伎の基礎知識 伝統を引き継ぐ郷土芸能〜篠路歌舞伎〜』をまとめた。さらには以前から目指してきた大人の歌舞伎の復活へ向けて、昨年十月、朗読劇の形で「唐茄子屋」の公演を成し遂げた。「台詞は長く、若い声を出

す役の人は特に大変でしたが、自信を得ました。歌舞伎ができるよう精進を続けたんです」と大高さん。民俗芸能は過去の遺物ではないのだ。伝統の美しい所作と言葉が心身を育み、世代をつなぎ、地域をつなぐ。それは今を生きる強いパワーに他ならない。



『歌舞伎の基礎知識 伝統を引き継ぐ郷土芸能〜篠路歌舞伎〜』。歌舞伎の基礎知識、道内外の農村歌舞伎について詳しく記されている。

『The JR Hokkaido 北海道への旅』

The JR Hokkaido 編集部／編
A5判・208ページ 定価1,980円（税込）

巻頭特集が本になります！

歴代の本誌巻頭特集の中から選りすぐった16本を再録し、明治期から北海道を切り開いてきた鉄路と産業などのかかわりを説き明かします。本書のための書き下ろし原稿も収録。貼り絵作家・藤倉英幸の作品が彩る最新号までの表紙を全て収めたメモリアル版です。

お求めは書店またはAmazonなどインターネットで。

●お問い合わせ先／北海道新聞社 出版センター ☎011-210-5744



1月27日
発売